

隣接小学校において、互いの学力向上特配（A教諭、B教諭）を活用している例（一部教科担任制）

校名	桐生市立北小学校								桐生市立菱小学校									
学級数	学年	1	2	3	4	5	6	特支	計	学年	1	2	3	4	5	6	特支	計
	学級数	1	1	1	1	1	1	1	7	学級数	2	1	2	1	1	1	1	9
特配 教員等 活用 状況	A教諭（北小置籍 週16時間）									B教諭（菱小置籍 週15時間）								
	<ul style="list-style-type: none"> ○毎週月・水曜日は北小で一日勤務 ○火・木・金曜日は北小と菱小で勤務 ○北小の4・5・6年の理科（3時間×3）を担当 ○北小のクラブ活動・委員会活動（1時間）を担当 ○理科専科 									<ul style="list-style-type: none"> ○毎週火・木・金曜日に菱小でも勤務 ○菱小の4・6年の理科（3時間×2）を担当 								
	<ul style="list-style-type: none"> ○毎週月・火・木・金は北小でも勤務 ○北小の5年の算数（5時間）を担当 									<ul style="list-style-type: none"> ○毎週水曜日は菱小で一日勤務 ○月・火・木・金曜日は菱小と北小で勤務 ○菱小の5・6年の算数（5時間×2）を担当 ○算数専科 								
	音楽専科									音楽等専科								
	<ul style="list-style-type: none"> ○全学年の音楽（10時間）、5・6年の家庭科（2時間×2）、3・4・5・6年の社会（2時間・2時間・3時間・3時間）を担当 → 4・5年の担任が特別支援学級のT2を担当 									<ul style="list-style-type: none"> ○1・2年の音楽（2時間×2）、3・4年の音楽（1.7時間×2）、5・6年の音楽（1.4時間×2）、3・4年の図工（1.7時間×2）、5年の家庭科（1.7時間）、6年の家庭科（1.6時間）を担当 								
成果 (○)と 課題 (●)	<p>① 兼務教員を活用した教科指導の連携による学力向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ○全国学力調査・CRT検査の自校正答率を高水準で保持できた。 ●教務主任の持ち時数に制限があり該当教科全てを指導することができない。 <p>② 小中学校の9年間を見通した教育課程の作成</p> <ul style="list-style-type: none"> ○中学校での指導経験を生かし、小中学校の9年間を見据えた小学校の教育課程を作成している。 ●「小小連携」であるため、中学校の教育課程を作成することができない。 <p>③ 中一ギャップ解消に向けた中学校への円滑な接続</p> <ul style="list-style-type: none"> ○校区の中学校の学習の手引きを参考に自校のルール作成・改訂を行った。 ●「小小連携」のため、中学校の立場からの手立てを講じるのが困難である。 <p>④ 小中のつながりを考慮した校内研修、生徒指導での連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「主体的・対話的で深い学び」を目指した「学習過程（主に交流活動）の工夫」について校内研修で取り組んでいる。 ●「小小連携」のため、校内研修や生徒指導での直接的な連携が困難である。 <p>⑤ 兼務教員の活用による学校経営上の効果の検証</p> <ul style="list-style-type: none"> ○新学習指導要領への対応について、中学入学時に2学校間較差が生じないように、緊密に情報交換を行うことができた。 ●週3日、「北小→菱小→北小」の移動があるため、準備に時間を要する実験や観察の授業がある場合は、非常に忙しくなる。 <p>⑥ その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ○特配が配置されたことにより、理科専科、算数専科、音楽専科、家庭科専科、社会科専科をおくことが可能になり、学力向上に大いに役立っている。 ●特配が配置されなかった場合、これまで行ってきた学力向上対策の大幅な後退を余儀なくされるので、学校運営上深刻な問題となる。 									<p>① 兼務教員を活用した教科指導の連携による学力向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ○教科の専門性を生かした指導の充実や、児童の興味関心の向上が図れた。 ●行事等の関係で、実施できないこともあるので、時間割の作成上の配慮と調整が必要である。 <p>② 小中学校の9年間を見通した教育課程の作成</p> <ul style="list-style-type: none"> ○中学校に必要な基礎事項を踏まえて教育課程の作成を行う。 ●小中学校においてより効果的な系統性について確認を行う必要がある。 <p>③ 中一ギャップ解消に向けた中学校への円滑な接続</p> <ul style="list-style-type: none"> ○中学校での学習を意識していくことで、中学校に必要な基礎学習の充実を図ることができた。 ●中学校の専科教員との情報交換をより密に行っていく必要がある。 <p>④ 小中のつながりを考慮した校内研修、生徒指導での連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「小小連携」のため、北小学校、東小学校との足並みをそろえていけるよう意識してきた。 ●中学校に必要な事項についての連携の充実をより図っていく。 <p>⑤ 兼務教員の活用による学校経営上の効果の検証</p> <ul style="list-style-type: none"> ○学級担任の教材研究の充実が寄与することができた。また、新学習指導要領への対応について情報共有ができた。 ●兼務教員が教務主任の場合、在籍校での不在時間が長く、学校運営上配慮が必要である。 								